

## 「わが石炭資料収納庫」報告記

細川, 章  
多久市立図書館

<https://doi.org/10.15017/13612>

---

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 5, pp.109-119, 1975-06-25. 財団法人西日本文化協会  
バージョン：  
権利関係：



# 「わが石炭資料収納庫」報告記

細川章

## はじめに

七年程前から炭坑で使用していた用具類を蒐めはじめたのがいくらかまとまったので、この程わが家の古い倉に棚を吊って並べた処今迄物言わぬ個々の道具類に過ぎなかったものが、まるで囲炉裏端の老人のように、ぶつぶつと何かを語りかけてくるような感じになった。全体が連鎖して一つのものとしての主張をはじめたかに思われてきた。

私たちは初めからこれらを単なるコレクションとして扱いたくはなかった。客観的にはコレクションに違いないが、もっと、この地域で稲作に次ぐ重要な産業であった石炭採掘が惨憺たる崩壊を余儀なくされていく道程を、地元の唯一の文化施設である図書館に何らかの形で、歴史的遺産として残したかっただけでなく、これ迄全く無関心に過ぎた炭坑というものを、用具に直接触れ、用具を通して時代の転換の中での一つの証果が欲しかったのである。

と書くのと、まことに大袈裟と笑われてしまいそうであるが、道具をただ、〃もの〃として片付けるのではなく、〃もの〃の中に籠められている筈の、これに関った人達の哀歓の日々や思いの深さを〃ものを媒体として改めてなぞらえてみたかったのである。であるから、

杵島本坑の事務室に祀られていたという〃山の神〃や棹取小屋にあった手製の仮寝用〃枕〃、更衣室の〃頼母子講箱〃を集めるののためにうらひはなかった。

さて倉に一通り並べたところで、この蒐集を始めるに当たってのヒントを与えられ、共同の作業として手伝って下さり、終始温かく励まして下さった九州大学の秀村先生に御報告したところ、大変喜ばれて、「石炭のアチックミュージアムとして、是非その経緯を報告して下さい」とのことであった。が、裸電球がぼんやり灯るだけの、まるで坑内のように暗くて狭い倉の中は、決して博物館などという大それたものではない。然し、この七年間営々と築いて今日に到った道程を振り返ってみると、これは決して一個人の力ではなく沢山の人々の善意ある援助の結実であることに気付き、如何にささやかなものであったとしても、明らかにすべきではないかとペンをとった次第である。

## 石炭採掘における多久の略況

多久の石炭採掘は藩政時代の文書に既に散見出来る。その記事は幕末期に入る程に増してくる。明治期に入ると西洋技術の導入によ

り次第に深層部の採炭が可能になり、一層積極的な個人の事業となつて、各人の家の記録を残すことになる。

この間、長崎への異国船来航、日清、日露戦役がその需要を促進したのであることは容易に肯定出来るが、重要なのは日本の近代化が此の石炭の供給によつて始つたことであつた。にも関わらず、これは決して平坦な道ではなかつた。

殊にずっと「焼殻」にして売つていた石炭が慶応元年、佐賀藩海軍船艦が数を増やすに当り、生石を出すようになって、その運搬は困難を極めるのである。明治三年四月、多久村東の原土族柴田勝永は山崎土場どばから多久川（多久川は牛津川に注ぎ住ノ江港に通じている）への水路開鑿について次のような出願書（草案カ）を残している。

『……同郡（小城郡）多久原村野中治平、同郡小侍村字蜂ノ巣石炭ヲ採掘シ同海軍所エ上納セン事ヲ謀ル、後多久原村々山良次其他ト同盟シ蜂ノ巣石炭開坑ノ願ヲ差出ス為メニ運輸ノ至難ナルヲ臆量シ如何ス可キヤヲ同人ホニ詰問スルニ、馬背ヨリ駄送スル外目的ナシト答フ、依テ我年来胸算用アル多久川通船ノ便ヲ説ト雖モ危疑シテ須ヒズ、重テ其方法ヲ細話シ資金ハ他ヲ恃マズ自辨セン事ヲ言フ悉ナルニヨリ漸ク解悟シテ承諾ス、其川船ヲ通ル計画方法ハ二里餘ノ山川瀬々小石ヲ蜜敷スルヲ掘、深ク大石盤若アル箇所ハ石工器械ホヲ以テ鑿除シ、椀ノ瀬、羽佐間・作水溜ノ両堰ハ松板ニテ箱ヲ差シ船路ヲ通シ、処々飛石アル渡場ハ便宜ノ場所ニテ壘石ヲ除キ船路ヲ通シ、厚板ニテ掛橋ヲ設クルホ此レナリ

一、明治三年四月出願、同年十月免許  
一、同年十月着手、同四年二月成功』

（柴田勝永文書ヨリ抜書）

勝永はこのあとに続けて「此ノ川常水稀少ニシテ急瀬多シ、河船ノ通ル事、世人ノ未タ夢ニダモ見ザル処ニシテ、我ヲ怪ンテ狂人トス」と書き、川沿いの諸村人民の妨害や洪水に遭遇しながら「疾苦困難三四年間久耐シテ真ノ成功ト云ヘキナリ」と結んでいる。

また多久原村の坂口炭坑から東多久村納所おきよの多久川沿川岸にある赤石までの五軒の間に軽便鉄道を敷設したのは明治二十四年であつて、これは当時の北多久村村会議決録に決議文が残っており、多久原区有文書壱号「人名並議決簿」（明治廿一年十一月より廿五年六月五日まで）の中には、多久坑業会社の鉄道布設工事に関する部落民の協議事項が数回に及び記録されている。

丁度この頃、幕末から明治中期にかけて、稗田麟蔵・市郎次父子、副島五郎・哲吾父子、安倍宗五郎、横尾庸夫・高取伊好兄弟がそれぞれ狩谷・大副山・麻畑山・峠山・柚木原その他の石炭坑採掘をやつており、今に各家の記録史料として残つていて、当時の坑山経営の苦衷を生々しく浮彫りにしている。条件の悪い状況は坑主をも坑夫をも苛んだものではなからうか。

其後も況、不況の波は交替して寄せて来るのであるが、決定打を打込まれるのは朝鮮戦争終了後に始つた。昭和三十年八月「石炭合理化臨時措置法」施行によつて、日本の石炭産業そのものが根底から問直され、合理化対策が進められることになつたのである。それ

はスエズ動乱でいくらか立直るかに見えたものの、エネルギーとしての価値が次第に液体燃料への依存度を強めた為、多久の中小坑の倒壊は拍車をかけて進んで行った。資本力の浅いそれら坑山は退職金どころか給料すら未払いのままの所が多く、仕事を失うと同時に生活保護を受けるか、失業対策事業の人夫として働かねばならなかった。

この頃多久市立病院では、旧坑跡のバラックの住民達に重症患者が多く、入院させようとするが殆ど一族が一組の布団に放射状に入って寝ているので、病院に連れて来ることが出来ないで困っていた(当時入院は布団持参であった)。それは病状を悪化させるばかりでなく、家族全員に伝染する恐れのある場合もあったのである。そこで病院長松永医師は夜具類の供出運動を起したことがあった。母に頼まれて幾枚かをリヤカーに積んで届け乍ら、そんな暗い谷間が此の土地の何処にあるのかとぼんやり考えるだけで、私はまだこの実態に眼を当てる事が出来ないでいたのである。小中学校の教師は昼食に弁当を持って来ない児童の取扱いに討議を重ねていた頃であった。既に石炭産業の命運は確定していた。にも関わらず、明治佐賀坑、三菱古賀山坑、明治立山坑、小城坑などは健在で、此の貧しい農村に於ては尚特権的な存在であり、豊かな社宅の生活者は危殆に瀕している人達の数倍に及ぶものであったので、凡庸な市民に過ぎなかった私は一つの歴史の動搖の気配を感知出来ずに過してしまつた。

ところが昭和三十七年に小城炭坑、同三十八年明治立山坑、同四

十三年一月には多久市で最大の規模を持つ三菱古賀山坑が閉山した。亦、同四十四年四月に閉山した杵島鉱業は現在多久市内では無いが、旧多久領であり、企業創始者が多久出身の高取伊好であったことも手伝って職員にも多久人が多く、土地の人達が農作物をはじめあらゆる産物を行商に行く重要な市場でもあった。その為に峠にはいくつかの道が作られていた。

こうしてなだれ閉山する中で、学校の運動場の整地をしていた人達が石炭層の露出しているのを見付け、掘って売却した代金で豪遊した話や庭木の手入れをしていて見付けた炭層を夢中で掘っているうちに家が傾いてきたといったユーモラスな話が伝わって、運命的な多久と石炭の関りの深さが一筋の光芒となって駆けぬけていくのである。

そして遂に昭和四十七年十一月末佐賀県最後のものとして、明治佐賀坑、明治西杵坑の崩壊に到るのである。西杵坑も亦杵島坑と同じく旧多久領であり、馬神峠を境に密接な関連を保ち続けた礦山である。

こうした状況の中で私たちは石炭資料の蒐集を試みたのである。

### 資料蒐集へのきつかけ

最初は石炭資料だけでなく、農具などを含む民具資料全般の蒐集からはじまった。その関心を誘発したのは昭和四十二年四月から八月までアメリカ、ヨーロッパに行かれた九州大学の秀村選三先生が彼の地から下さった三枚の絵はがきである。参考の為に、その関連

ある部分を引用させて頂きたいと思う。

一便は五月二十三日付でアメリカ、ニューヘブンのイェール大学からで、はがき一枚に古い家屋の内部が写って居り、各種の用具がまるで日常の中の或時間を静止させた様な形でまとめられ、人影だけが蒸発してしまつたような感じで、お便りには「東部の方はアメリカとしては歴史の古い所で、古い家屋や生活用具を保存している場所も多いので、出来るだけ見て廻っています。(中略)多久にもこんな家を保存して生活用具を保存されては如何かと思ひました」とあつた。

二便は六月十七日付パリからで「何よりもフランスの村や畑、農家、田舎町を見ることが出来て幸でした。封建社会を経た国は何となく親しく、日本と非常に似た感じを持つ時もある、納屋の廃屋など、日本の村に史料調査にきている錯覚を起しそうです」と日本の農村に対する情感が滲ませてあり、写真はロアール河の彼方に広がるフランスの村が美しかった。

三便は七月十三日付リュベックからで「ことにいろいろな博物館が大変勉強になりました。CopenhagenのFrilandsmuseetはたくさんの方と民具をそのままに保存して静かな野外に昔の生活を偲び、東西の文化の比較をして大変面白うございました」と書かれていた。

丁度この数年位前から、此の土地にも農作業の機械化導入が急激に進行してきて、労働形態の変化に伴い生活様式が移行したため、使い馴染んだ道具が道端や空地にどんどん捨てられていた。当時、

炭坑の問題より遙かに身近かく胸の痛む出来事であつた。簡単に忘れ去るに偲びない、それは長い年月人の手から手へと渡し継がれた汗と脂が刻み込まれている筈である。あれ程の熱い歴史が時勢の推移によって消滅させられてしまつてよいものであろうか。たとえその形だけでも後世に遺す義務が私たちには課せられているのではないだろうかと思ひ乍ら、尚、何の修飾もないまことに日常的で素朴な生活・生産用具が博物館の素材にならうとは、前述の絵はがきを丁載する迄思ひ及ばなかつたのである。

漸く「民具蒐集」ということに気付き乍ら、実際にとりかかるといふのは、その手段や処理の問題、費用、収蔵などを考えると、小さな農村図書館の一職員に過ぎない私は唯々足踏みしてしまふばかりであつた。

帰国なさつた秀村先生から「いつかお話ししていた民具(生産の用具や生活用具)の蒐集保存も再びはじめたいと思つています。多久地方ではいかがなものでしょうか」とお便り頂いたのは四十三年二月に入つてからであつた。一月に三菱古賀山坑の閉山を複雑な思いで見送つていた頃であつた。秀村先生方グループの民具蒐集が多久で行われるのなら不足した知識を補うのに良い機会であつた。「石炭関係資料の蒐集に乗り出されるお話まことに結構なことで、是非御指教のほど願ひ上げます。私も今年度の研究費で農具や石炭関係用具を収集したいと存じますので秋には押しかけて参ります」のおおがきが届いたのはもう夏の日射しが強い季節であつた。

第一回目の民具蒐集の為の打合せに秀村先生が福岡大学の武野要

子先生と多久に見えたのは九月十八日であった。この日のことを私はノートに次の様に記している。

『多久市の喪われていく民具を今のうちに保存しなければならぬ』  
「多久的市に一年近くなる。はじめその動機になったのは秀村先生がアメリカから下さった絵葉書である。そして今年（昭和四十三年）八月保存蒐集のための調査の御申込があり、これを機に私も多久という土地に保存運動を起したいと考えた。このことを先日教育委員会に提案したけれども「この赤字財政の多久で蒐集後の保存管理の問題に見通しが立たない」と取合ってもらえなかった。こうなるとこれは私自身の仕事としてやる他はない。打合せのため秀村、武野先生が見えたのは九月十八日である。（中略）ここで協定がまとまった。共同戦線を張って出来るだけ同じものを二点探して九州大学、多久に分ける。一点しかない時はよく協議することとした。私は調査への協力を依頼され乍ら、その調査を逆用して尻馬に乗り私自身の目的を達しようと思論んだのだった。』

こうして昭和四十三年九月末から四十五年三月末にかけて蒐集作業がはじまった。メンバーは既に記した両先生の外に当時福岡大学にいらした松下志朗先生（現、九大）、佐賀大学の長野暹先生——この先生には前に村役場資料の蒐集や整理で、お世話をいただいていた——と諸先生が引率していらした学生さん達、多久側からは西杵炭坑に勤務していた竹葉俊夫、西多久で農業をしていた福島正芳、公園管理人の坂田忠（もと立山坑、坑内大工）の各氏に、地元の好意を溢れさせた沢山の人達である。

ここで調査の第一歩の目安を、古い道具を使用した体験者に当るといふことになり、各地区で六十五才以上の老人を対象に開催されている「老人クラブ」に置いた。そして先ず、提供してもらいたい品名を「古い道具類のいろいろ」としてガリ版にし、八百三十枚を刷って「老人クラブ」に配付したのである。

### 人々との出会い

先生方と農具のために農山村の部落を廻った日々も有意義で、いろいろ学ぶことも多かったが、ここでは焦点を石炭資料、用具に絞ることにしよう。四十三年十月十日から十三日まで専称寺に泊り込んで調査と蒐集を続けていた秀村先生グループ（武野、松下、長野先生ら）と、いよいよ石炭用具への期待をこめて、旧炭坑地帯である北多久山間部を徘徊はじめたのは十一日午後からである。先ず市役所に行つて、多久の石炭産業史に詳しい川内財政課長ととも鳥越坑主の鳥越信一氏を交えての座談会をテープに収録、凡その目標を定めようとした。然しこれは、行動は先入観に囚われず時宜に即した決断が必要であるとの教訓を与えて呉れたのであった。が、それは別にこの時の座談会は大変得ることが多く、収録したテープも亦重要な資料なのであるということを感じたのである。

北多久町老人クラブに行つたのは十二日の午後になってからである。北多久町の中でも多久原区は殊に石炭採掘の盛んであった所で「お地藏さまと観音さま以外は皆掘っていた」と伝えられている所である。会場の「天山荘」はこの多久原に隣接して居り、管理人は

じめ働いている人は皆炭坑離職者であった。果して用具のことを持出すと俄然会場は湧き立って殆ど聞取り不能な状態になる程であった。此処で今後の為に重要だからと選んだのが、四下部落の柴田茂一、イサさん夫妻と、前田部落の前田喜六さんであった。殊に二十才で鈴葉山坑に入りスラを曳いていたイサさん（明治三十年八月生）は美しい唄声で坑内の若者達を魅了し、その唄を聞きたくて鈴葉山に働きにきた青年も多かったという。「どんな唄ですか」と聞くと、もう七十才近いイサさんは恥ずかしそうに「セトウ打ちの唄、スラ引き唄、後山の唄、田ん草とり唄ぐらいじゃるか（ぐらいだるうか）」と云って逃げてしまつて、唄ってはもらえなかつた。

この時は茂一さん（明治二十五年三月二十五日生）の体験談をテープに入れただけであつた。前田喜六さん（明治二十八年二月五日生）は四十才まで旧立山で釜炊きをしていたという。大変用具のことに詳しく話好きの人で、家から「一尺」や「せつとう」を持ってきて下さつた。それはまだ日用品として使用していたものばかりであつた。

以上の人達は皆快く話に乗って協力を努めて下さつた。本当に善意の人達であつた。参考になる話題も何本かのテープに採つた。然し用具蒐集となると、さ程の成果をあげることが出来なかつた。私たちは度々旧坑跡を彷徨しながら「まるで屑拾ひになつたみたい」と笑い合つた。雑草の生えかかつたボタ山はもう全く精気がなかつたし、元坑夫という住人達も思ひ出話には表情が綻んだけれども、用具のことになると気の毒そうな面持で「もう手おくれですなあ」と

云うのだった。せめてもの堀出物は鳥越信一さん（明治三十三年生）の甥の豊治さん（大正十一年生）が柚木原の鳥越坑で使用していたという「軽便車」を保存して提供して下さることになつたことである。然しこれは一台であつて、私たちの約束ではどうしてももう一台探し出さねばならなかつた。それに一軒一軒の家を廻つて、物乞いするような遣り方でどれ程のことを期待できるであらうか。

用具製作者としての坂本光次さん（明治三十四年生）を紹介して下さつたのは、もと柚木原坑で働いていた稲富好雄さん（明治四十二年生）である。既に失われた用具を求めることの虚しさの中で、若し新しく作れる人がいたらその方が良いのではないか、ということになり適任者を求めていた矢先である。多久には小坑山が朝鮮戦争の頃まで沢山あつて、薄層を全く機械を用いず、スラで引出し、竹製の万石で選炭をしていたという。その人達の記憶を再現しようということになつたのである。近代的な設備を完備した礦山の用具などとても私たちの手に負えるものではないし、収蔵する場所だけでも広大な敷地を必要とする。それに私には巨大な選炭機一つとってもその機能を理解することなどとても出来そうにないことであつた。そこで手堀の段階を重点的に行うことになつたのである。それは先生方も近世や明治前期の経済史を専門とされるだけに当然のこと、多久を選ばれたのも小山が多いからであつた。

坂本さんはもと三池坑に二十年余り働いて柚木原に来た人で、光の少い部屋の中で黙然と坐っていたのが、筑豊の山本作兵衛さんによく似ていらつした。坂本さんを訪れたのは、第一回調査最後の十

月十三日で、秀村先生は「カルイ」「ぞうり」(先山・後山用)、「シユモク」などの製作を早速二点ずつお願いされた。このあと二ヶ月程して更に箱スラをも作っていただくことになった。こうして入手がたいものは新しく作成するという思いつきは、次にくず鉄屋、古物商などで購入するという着想を促していった。竹葉さんの車に秀村・武野・松下の諸先生と共に乗って大町のくず鉄屋へ行つたが、炭礦用具を見出すのは、なかなかむづかしくこの時も竹葉さんの経験が大いに役立った。

十一月に入って今度は炭坑労働に従事した人達の生の証言を収録しようということになった。これも時が過ぎれば霧のように消えてしまふからである。この人達には横柴折の稲富さんと四下部落の中村信一さん(明治四十二年十一月二十日生)が当って呉れた。その結果、昭和三十五年まで畑瀬坑をやっていた畑瀬芳三さん(明治十七年十一月二十五日生)、十二才の時、巖木の滝本炭坑を振出しに樺太迄渡って石炭採掘に生涯を賭けたという市丸秀太さん(明治十二年五月四日生)、笹原峠の滝の山坑主であったという七条軍治さん(明治十九年十一月二十五日生)を選んだのである。この人達は暗い夜道を歩いても躓づいた石が石炭なら、何処の坑山のどんな石で何カローリ位のものか判別出来なかつたら一人前の坑主ではないと豪語する人達であった。そして一様に、多久、巖木、相知を主な舞台にして活躍した人達である。

この他に女坑夫の労働を語ってもらうため、女一人で枠組みから棹取りまでしたことがあるという北里ハツネさん(明治四十一年七

月二日生)、如何にも農村人らしいつましやかな増山ツルミさん(明治四十四年三月十五日生)を選んでもらった。勿論この時前記の柴田イサさんもお願ひしたのだけれども来ていただけなかったのは残念であった。これは座談形式でテープに収録することになった。十一月二十八日のことである。市丸、畑瀬、七条さんの組を稲富さんに司会して頂いて七条さんの家で、北里、増山さんの組を中村信一さんに司会してもらって、中村さんの家で行った。

ここで七条さんを除く全部の人がその時ももう生活保護か失対事業の人夫になっていたのであるが、それだけに華かな時代への哀歓ともともに、本当に楽しい語りであった。先生方は筑豊での調査と重ねて「どうして多久の人達の話は暗くないのでしょうか。」「何かとても牧歌的な感じがしますね」としきりに感心しておいでになった。これは単に危機感が時間の経過によって色あせてきたということではないと思う。この土地の人達の性格的なものもあるのではないだろうか。代々農業で生き継いできた人達の風土と一体になった独自の人生感ではないだろうか。これはまた用具だけでなく用具にまつわつた人達の生き方も、時勢の波に風化してしまわぬうちに記録しておく必要を痛感させることでもあったのである。調査の枠はこうして時として思いがけない展開をして私たちを喜ばせて呉れたのである。

聞き取りは此のあと、四十四年一月から五月にかけて、九才からカンテラを銜くはえてスラを引いた為前歯が一本もない樋渡カヨさん(此のおばあちゃんは自分の年令を知らなかった)、前記の市丸秀太



さんが四十五年一月二十五日、三月一日、女坑夫の藤原ツル子さん（大正十二年十二月十五日生）は小坑から小楠坑での作業のことを三月二十五日に、また北里ツネさんは三月二十七日に、中村信一さんは納屋頭の息子としての体験を、炭坑絵馬で有名な稗田麟蔵の孫娘になられる稗田ツネさん（明治二十三年生）には三月十九日に、といった具合に連続して行ったのに、皆大変よく協力して下さった。そしてお別れする時は何か記念になるものを下さるのだった。例えば市丸さんは半生の礦山師として生活の中で手放したことがなかったという、ネーム入りのピックルを、増山さんは曾って坑内で着ていたものと同じマブギ、マブベコを緋の布地で作って下さるというように。

このようにして出会った沢山の人達、調査に参加された先生達とそれぞれの学生さん達、石炭という一本の糸に繰られて交錯した不思議な時間の重さに、屢々凝然と佇むことがあった。然しその故にこそ資料も用具も私たちがのように、これ迄全く無縁であった者達の手に落ちても、有機的に関って呉れるように思われたのである。

この後にも協力者として、もと立川坑で働いていた坪内安衛さんや、当時秀村先生方と『筑豊石炭礦業史年表』の編集にあたっていた日本大学の田中直樹さんがいる。坪内さんに案内されて秀村先生と共に福島炭礦にも行って、坪内さんの車一杯に積んで帰ったこともあった。四十八年の六月で、このころまでで比較的多量に蒐集出来る時は終わったようだった。

このほか手紙で励まして下さった北松浦郡の山崎末雄さんのよう

な人がいることも、一つの力になった。

### 石炭用具へのめり込む

七条軍治さんは小規模ながら、いくつかの炭坑事業に手を染め成功も失敗も繰り返してきた人である。そんな中で、自分が死んだら生涯に手掛けた坑山の石炭を集めて亡骸を焼いてもらいたいと思いつち、一坑から一握りづつの石炭を寄せて蓄えておられた。私共が訪れた時それは既に五十一種類もあって、ケースに並べられていた。それはもう立派な石炭標本となっていたのである。前記十一月二十八日、七条家での座談会にうかがった時これを見付けた私たちは、それを重要な資料の一つにしたいと希った。その後数回寄贈して下さるようお願いしたのである。とうとう七条さんは折れて「もう諦めました。こうなったら早く眼につかない所に持って行って下さい」と笑いながら承知して下さった。内心はどんなに切ない思いであったかと、標本棚と共に、この七条さんの気持も一緒に今後担って行かねばならないと思った。

杵島坑が閉山したのは四十四年四月であった。歴史の古い此の礦山には早くからいろいろな用具が蒐集出来るのではないかと張切つて居たのに、丁度私は入院していて、大事な好機をみすみす逸してしまった。退院して杵島坑に行けたのはこの年も秋になってからであった。私にはまだ充分に礦山関連用具を見極める自信が無かったので、西杵坑に働いている竹葉俊夫氏、もと立山坑で坑内大工をしていた坂田忠氏にきてもらった。もはや殆どの建造物が破壊され、

赤肌の土が生々しくむき出しになっていた。然し半壊のコンクリート壁の間には点々と、キャップランブ類、カバン類、様々の形をした鉄片類が転っていたのである。「あったノ」と私たちは夢中で拾いはじめた。戦時中から戦後にかけて使用されたというゴム靴を見付けた時は歓声を挙げたものである。こうして一生懸命拾い集めている手元に大きな保安靴が立ち塞がった。はっと驚いて顔を上げると、大きな人が何とも難しい顔をして立っている。「何か御用ですか」と問いかけようとする私に「一体何の目的でそれを拾っているのですか」と詰問調であった。つまり私達は会社の私有物を盗んでいたことになるのである。名刺を出して汗の噴き出る思いで弁解すると、すぐ理解して下さって逆に、はいていた御自身の保安靴まで脱いで下さったばかりか、奥に残してあった新しいスコップなども次々に出して下さった。この人は残務整理のため残っていた中田岩男さんという方であった。その後、中田さんを頼って竹葉さんの車に秀村先生方と共に乗せてもらって、多くの用具やポスターなどをいただきに行った。挙句は、杵島本坑に祀ってあった山の神を丁戴することになった。九大には杵島二坑の山の神をいただくされた。

南方に有明海がかすみ、北の山裾に連々と炭山を抱えている杵島郡北方から江北にかけての道添いには、六角川が住ノ江港に向って蛇行していて、藩政時代から明治期も石炭船が運行した水路である。杵島郡の方を通過する度にこの石炭の積出し文書は残っていないかと、六角川沿いに調べたりした。せめて一艘の石炭船でも無いだろうかと尋ねて歩いたが、やはり時期が少し遅かった。多久川の方は

四十四年秋、山崎土場近くの公民館の床下に石炭船が入れてあるという人があって、私たちは色めき立って出かけたのであるが、此の年の春先急に訪れた寒波に薪が無くて、若者達が引出して燃やして暖をとったということだったのである。

船が欲しい——それは切ない願望になった。四十七年六月、伊万里土木事務所で、廃船処理をするのに、焼却するには燃料費がかかりすぎるので埋立地に埋立られるというニュースが入った。若しやと現場に行つて写真を撮り、知っている人に見せると、幾つか石炭船らしいものがあつた。しかし、これも手続きで時間がかかり過ぎているうちに、手おくれとなつてしまい、馳けつけた時にはもう処理されてしまつていた。

然し舟はもう一つあつたのである。東唐津松浦川口（もと満島港）にあるのを、松浦橋を渡っていた中村信一さんが見付けて教えて呉れた。がそれは、巾が三米半、長さが十米を超えるという大きなものであつた。長い間使用されていないらしく、船の中に草が生え、胴体には苔が付いて、洗濯物や玉ねぎ等が干してあつた。いろいろな手を尽くしたけれど、これもまた輸送の都合がつかないということであつた。

同じく満島の船問屋で石炭商の山崎和太郎氏の文書を見せて頂く為の伝手が出来て、秀村先生方と山崎家を訪問したのはこの一年後であつた。この時、松浦川口の石炭船はもうなかつた。また山崎家の文書も、二年程前に浜に釜を築いて四日もかかつて焼却した後であつた。山崎家のおばあさんが気の毒がつて、連れて行つて下さつ

た青木家、河野家で僅かな文書を見出し、手写して帰ったのであった。

そういえば屑鉄屋で買っていた用具の価格が、一疋二十円か三十円位だったのが、四十円から四十五円になったのも四十七年四月頃ではなかったろうか。

佐賀県で最後の炭礦、明治佐賀坑、西杵坑が閉山したのは四十七年十一月末である。この頃は不思議に毎日冷たい雨が降って、私たちは雨の中で泥んこになって蒐集作業をやらねばならなかった。

「労働力不足です」と軽口を叩いたばかりに、福岡から来て下さった秀村先生や松下先生が、寒さと汚れに手をかじかませ、髪の前から雨を滴らせて用具を運んでいらっしやるのを見た時、何とも胸が痛んだ。地元からの労働力は此の最後の段階になって尚福島さんと竹葉さんだけであった。此の土地の為にはじめたはずの仕事が、遂に大きな運動にはなり得なかった。

例えば、一台の坑内に人員を運ぶディーゼル車を欲しいと思っても、運搬費と収納場所の問題だけで挫折してしまうのである（もともと、ディーゼル機関車だけは秀村先生から西日本文化協会に話していただけで、一台はとりとめ、現在どこかに保管してある筈である。また、書類も提供してもらうことになっても、四トン積のトラック二台の資料が運ばれて来ると、もう皆右往左往して、その収納に頭の痛い思いをせねばならない。何処に置いても臨時的処置という但書きがついてしまうのである。土台から個人の仕事として扱うことに無理があったのではなからうか。用具についても詳細の知識

の無い私たちは、結局意味のない廃品の山を、貴重な労力によって購っているのではないか。という疑問にぶつかると、ただただ途方に暮れる思いであった。

然し「ケンカキ」だけでも二十本近いものが集った。そのどれとしてみても同じものは無い。それは棹取りが各自自分で使い易いように工夫して手作りするからである。赤や青のテープが巻いてあるのも自分の掌の握り心地に合せてあるのである。それを毎日鏡のように磨いて己れの魂としていたという、棹取りの心意気を想う時、やはりその道具はそのまま朽ちさせてしまうことは出来ないと思った。

ボタ山のあたりを歩いていて、二枚の板を針金で結んだ妙なものを拾った。聞いてみると「のこぎりの目立て」という農家で手製するものだそうである。農家からきた坑夫の作ったものでしょうねという、炭坑で働いている土地の者は殆ど農家からの出稼ぎで、どうしても家で使い馴れたものを作るようになることであった。その事情は藩政時代から少しも変わっていなかったのだ。そういえば初期の道具の何と農具に似ていることであろうか。箱スラは山馬に箱を乗せたもの、ばらスラは竹籠を乗せたものである。ともかく私たちは小さな力で、それだけに懸命になって、これらはずっと後の人の為に小さな小屋の中に石炭資料を残しておいてあげなくてはいけない。とやっぱり思ったのである。

### このあとへの願い

用具は昭和四八年三月ころ約五六〇点集まっていた。その後は数

えていないので、正確な点数は分らない。いづれ一点ずつ目録を作成するつもりである。

一倉の中は一階が用具室、二階が資料室になるようにしたいと思っている。そしてこの運営は蒐集にたずさわって下さった人々で行きたいと思っている。蒐集が個人の力では如何ともなし難いのと同様に、資料も亦一個人が私有するものであってはならないと思うからである。それに不備の点、心残りのこととが余りにも多すぎる。蒐集もこれで終ったなどとは思っていない。出来れば皆でふくらませて行きたい。そのための場所であって呉れればと思う――踏み台であつてもいい……と思っている。

### 執筆者紹介（執筆順）

- |       |                                |
|-------|--------------------------------|
| 岡本幸雄  | 西南学院大学教授（商学部）                  |
| 今津健治  | 神戸大学助教授（教養部）                   |
| 秀村選三  | 九州大学教授（経済学部）                   |
| 和田一夫  | 一橋大学大学院博士課程（経済学研究科）            |
| 入江寿紀  | 西日本鉄道本社勤務                      |
| 東定宣昌  | 九州大学経済学部助手                     |
| 左合藤三郎 | 元『日本労務管理年誌』編纂委員                |
| 北村慶子  | 福岡県文化会館図書部司書                   |
| 町田保次  | 佐賀行政監察局勤務                      |
| 坪内安衛  | 私設伊万里湾域石炭産業史資料室（元立川鉱業所労働組合委員長） |
| 田中直樹  | 日本大学講師（生産工学部）                  |
| 田中豊一  | 三井不動産勤務                        |
| 金子雨石  | 田川郷土研究会々員（元貝島炭鉱職員）             |
| 宮崎太郎  | 元労働労働運動家                       |
| 今野孝   | 麻生セメント本杜社史資料室勤務                |
| 細川章   | 多久市立図書館司書                      |
| 八田千恵子 | 佐賀新聞社勤務                        |